

はしがき

怪情報とはいわば負の世界の情報である。何らかの意味でまともでない輩が流す情報である。まともな情報が、いわば表通りを通るものとするれば、怪情報は胡散臭い裏道を我が物顔に闊歩するものであり、時として不気味な闇の世界に繋がる側面すらもっている。しかし、怪情報の怪情報たるゆえんは、私は怪情報でございと大見得を切っているものだけではないことである。様々なタイプの怪情報があり、極端な一方の極には、いかにもまともそうな様相をしているものがあるということが問題である。なかには、悪人がどう見てもまともに見えることがあるのと同様、まともな情報よりもまともに見えることがあり、表通りを何食わぬ顔をして歩いているので、それに惑わされて、被害を受けることも多々ある。

そのような怪情報は、まともな情報に劣らず、言語文化研究の対象として興味深い面を多分に備えている。怪情報の研究は、多面性を帯びており、コミュニケーション論の一環として研究することもできるし、危機管理の一環として研究することも可能である。異なる観点から独自に考えることもできるし、これらを統合して総合的に研究することもできるのである。そういう意味では、極めて魅力的な研究対象であることに間違いはない。

例えば、怪情報の典型的なものとして、怪文書や怪電話というものを例にとって考えてみよう。怪文書や怪電話の中には、一目で怪文書や怪電話であることが分かるものがある。例えば犯行声明や人をおとしめる目的のものなどはそのたぐいである。ところが、中にはいかにも正義面をしており、時としてまともな情報と見分けのつかないものもある。後になって被害を受けた人などの相談により、マスコミなどで取り上げられて社会問題になったりして、怪文書（怪広告）であったと判明するたぐいのものも多い。関係のない人にとっては笑えないでもなしということもあるが、被害を受けた人にとっては深刻な問題であろう。このような問題は、平安な住み良い社会を作るために、危

機管理の一貫として研究して、同じような被害を受けないように周知し、対策を講じておく必要がある。

怪文書の一種として、情報社会で大問題になっているのが、このところマスコミをにぎわしている「ハッカー被害」やコンピュータウイルスなどである。筑波大学でも一時不正侵入の被害を受け、常時目配りをし、対策を講じておく必要が広く認識されたことは記憶に新しい。この手の怪文書も、被害のない間是对岸の火であるが、被害にあった場合には、被害の程度にもよるが、深刻である。殊にホームページなどはハッカーやクラッカーがその気になれば、手のうちようがないであろう。アメリカの国防省のような嚴重な対策をとっているところにも入り込むことができるし、社会を混乱させることなどは、その気になればいくらでもできるらしいから、空恐ろしいことである。しかも、マスコミをにぎわすとそれに悪のりする輩も出てくるから、始末に負えない。

このようなコンピュータ及びネットワークに関わる怪情報対策は、現代社会を守るために、人材の育成をする一方、油断なくその対策を常に講じておく必要がある。そのためには、かなりの資金をつぎ込む必要があるが、安全保障のための費用として、やむを得ない時代になっていると言えよう。コンピュータといえども、安全はただではないのである。その意味でも、怪情報研究は重要な意味をもっており、まともでない対象と取り組むには気の重い面はあるが、言語文化研究の重要な研究対象であるから、避けて通るわけにも行かない。

いきなり気の重い話題に入り込んだが、もう少し他愛のない問題に目を移そう。学生が、「原口先生がほかの大学に移るといふ噂が院生の間で飛び交っていますが、本当ですか」と筆者に確認したことがあったのはついこの間のことである。この手の噂は、学生にとっては気になるものであり、未確認情報であるが、怪情報とまではなっていないようである。この噂が正しくないことが明らかになれば、その噂は紛れもなく怪情報になるところであった。しかし、その噂は事実であることが確認されたのであるから、真情報ということになる。怪情報と真情報は紙一重のところもあり、噂一つをとってみても、それが正しい情報でなければ、怪情報になるのである。そうなればデマ

とか流言飛語などというのと大差がないことになる。そのような情報は発信しないように心しなければならぬ（というようなことは、言うまでもないことであって欲しいものであるが）。

われわれの研究プロジェクトは、上でその一端を見たように、極めて多様性を内蔵する言語文化研究である。「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究（通称「東西特プロ」）は、5年計画で平成9年にわれわれの夢を乗せて船出したが、この3月でちょうど5分の3を過ぎる。船出はつい先頃のような気がするが、時の過ぎ去るのは実に早いものである。研究員の熱意のおかげで、研究はほぼ満帆順風の航海を続けている。しかし、これからの2年がまさに正念場であり、極めて重要である。

船長の交代が迫っている。図らずも他大学に転出する羽目になって、研究員の皆様方にはご心配やご迷惑をかけてしまったことに対して、心からお詫び申し上げる。しかし我が特プロ丸は、船長が交代しても、目的地目指して無事に航海できる体制になっている。既に目に見える成果があがりつつあることは、中間報告からも明らかである。舵取りが変わる方が、マンネリを打破し、その協力体制をより強固にし、目標目指してまっしぐらに進むためには望ましいのではないだろうか。幸いなことに、有能で献身的で情熱に溢れた舵取りが選ばれたので、乗組員が心を合わせれば、相当の成果をあげて目的地に首尾良く到達することは間違いない。

当然のことながら、2年後に目覚ましい成果をあげることは、われわれ自身のためであり、ひいては筑波大学のためでもある。既にいろいろな機会に述べたように、われわれの特プロ丸は、文科系と理科系の研究者が同じ特プロ丸に乗り組み、協力し合って研究が進められている学際的なプロジェクトである。その成功は、われわれの研究の領域を広げるだけでなく、工夫の仕方によっては、新しい学問領域を創り出すことにもつながるものである。新しい学問領域の創出は、文科系の活性化にも即繋がる面をもっている。その意味でも、これまでも増してさらに大きな成果が上がるように、乗組員のみなさんの創意工夫と熱意とエネルギーに期待してやまない。

特に若手の研究員は、自分の研究の幅と深みを増す絶好のチャンス

である。少しオーバーな言い方をすると、筑波の文科系が今後日本はもちろん世界の中で中心的役割を担うことができるかどうかは、われわれがどれくらい魅力的な成果をあげることができるか、また新しい研究の地平を切り開いて、それを人材育成に活用できるかにかかっている。わが特プロ丸の乗組員一人一人が優れた成果が上がるように研究にさらに一層専念し、本特プロの航海が成功裏に目的地に到達できるように、なお一層情熱を注いで健闘して欲しいと繰り返し言うのは、筑波の将来がかかっているからである。

及ばずながら、特プロ丸の航海の成功にこれからは側面から支援させていただくつもりであるが、特プロ丸の主役は言うまでもなく筑波の研究者であり、その奮闘努力なくして大きな成果は望むべくもない。筑波を日本の筑波に終わらせないで、世界の筑波にするためには、筑波人の一人一人が情熱の火を燃やし、ただひたすらに前進し、自らの道を切り開いて行くほかはない。

四分の一世紀の長きにわたって過ごした筑波はわが^{こころ}精神のふるさと、筑波の一層の発展を祈りつつ。

東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究
特別プロジェクト長
原 口 庄 輔